

田中康夫

(作家)

ローマ教皇の容赦なき警告

市場万能主義Ⅱ私益資本主義の暴走と破綻を事前に回避する。真つ当な勤性の暗黙知。こそ、洋の東西を問わず保守の要諦と僕は考えます。保守とは如何なるイデオロギーⅡ主義とも無縁。家族・集落・地域という人間の相貌と体温が感じられる社会に根差した叡智だからです。

昨今、社会や家族の人間的關係や文化・伝統とは「市場では数値に換算出来ない物」Ⅱ価値ゼロと捉える金融資本主義の妖怪が跳梁跋扈しています。資本が自由に国境を超え、事業展開する国家で税金を支払わぬ多国籍改め無国籍なモンスター企業が、国民国家Ⅱ

ネイション・ステートよりも上位に立って消費者Ⅱ国民を差別する惨状です。

第二六六代ローマ教皇フランシスコは自ら筆を執って昨年十一月、二八八節に及ぶ使徒的勧告「福音の喜びⅡエ

ヴァンジェリイ・ガウデイウム」を發布しました。

「多くの人々は貢献すべき仕事を得られず、挑戦すべき機会も与えられず、その状態から抜け出る事さえ叶わぬ中で排除され・疎外され」、「人間もその存在自体、使用後には即廃棄に至る消費財と見なされている。斯くなる、使い捨て」文化を我々は生み出し、而も急速に蔓延している」。

富める者が更に富めば、貧しき者にも富は滲透すると唱えたレーガノミクスに象徴される新自由主義のトリクルダウン理論、公益Ⅱ国民益を忘れた米国型の株主資本主義、中国型の国家資本主義への容赦なき警告です。

ロナルド・レーガンとポーランド出身のヨハネ・パウロ二世が共闘し、東側諸国の共産主義を瓦解させた冷戦末期と「真逆」の柔な託宣には決して非ず。寧ろ著述家で政治家だったエドマンド・バークにも通ずる心智と捉えるべきでしょう。

真つ当に働き・学び・暮らす市井の人々が、「ノブレス・オブリージュ」

の気概も覚悟も持ち合わせぬ「駄獣の群」な政治家や企業家に義憤を感じて蜂起する前に、「人々の革命への要求を先取りするような、その結果、人々が革命など必要としなくなるような賢明な政治」こそ「真の保守」。

そう説いた一八世紀のバークと二一世紀のフランシスコは奇しくも今、取り組むべき「保守点検」の通奏低音を奏でているのではないのでしょうか。